



第十六回全国模擬授業大会

創学舎 団体戦 準優勝

高寺先生(我孫子教室長)

社会部門優勝&個人戦優秀賞受賞

全国の講師が一堂に会し、その授業力を競い合う「第十六回全国模擬授業大会」が五月二十八日に栃木県足利市で開催され、創学舎 我孫子教室長の高寺先生が見事社会部門で優勝、さらに各科目の優勝者の中で審査される個人戦で優秀賞(全国第二位)を受賞しました。ちなみに最優秀賞の方とのポイント差はほんの僅か……惜敗です。



また、今大会では四年ぶりに、各塾で競い合う団体戦が実施されました。創学舎は四度目の優勝を目指しましたが、こちらも接戦の末、惜しくも準優勝でした。また来年以降、皆で優勝を目指します。

生徒の心を掴んで離さず、知識の習得以上に

授業で取り上げられた周縁のことにも興味を持って生徒が自らの学びを起動させる。そんな素晴らしい授業を披露してくれた高寺先生に今大会に懸けた思い等を聞いてみました。

「この度は社会部門優勝ならびに個人戦優秀賞受賞、誠にありがとうございます。まずは一言お願いいたします。」

今回、いろんな方に褒めていただきましたが、そのことに対する嬉しさとか、受賞した達成感とか、そういったものはあまり感じていません。勘違いしないように、調子に乗らないように、ここで改めて気を締めないといけないと思つています。ただ、自分がやったことに対してたくさんの人が喜んでくれたことはものすごく嬉しかったです。新卒で入社して今年で十二年目。これまでお世話になってきた方々に、少しだけですが、恩返しができたのかなとは思っています。

「今大会に出場する際、どのような意気込みで臨んだのでしょうか。」

本当は出場するつもりはなかったんです。(笑) WBC決勝戦の日、侍ジャパンの歓喜にテンションが上がっていたときに村田先生に誘っていただきました……。勢いで、出場すると返事をしてしまいました。(笑) 一緒に出場した後輩たちも頑張っている中で、自分が不甲斐ない授業をするわけにはいかないという気持ちで頑張りました。

「今大会の授業を作る上で気をつけたことや大切にしたこと等があれば教えてください。」

今回、『言葉選び』には時間とエネルギーをかなり使いました。私たち創学舎の講師は授業を作る際、セリフをすべて文字に起こして授業台本を作ります。なるべく無駄な言葉を省いて論理を際立たせるためです。その台本をもとに自分の授業を撮影するのですが、いざ授業をしてみると、話し言葉として違和感があるフレーズやリズムの良くない言い回しが浮かび上がってきます。そこをまた修正した台本を作り、動画を撮影し、また台本を作り……。これを十回以上は繰り返しましたね。もう自分の授業は見飽きました。(笑)

「この喜びを誰に伝えたいですか。」

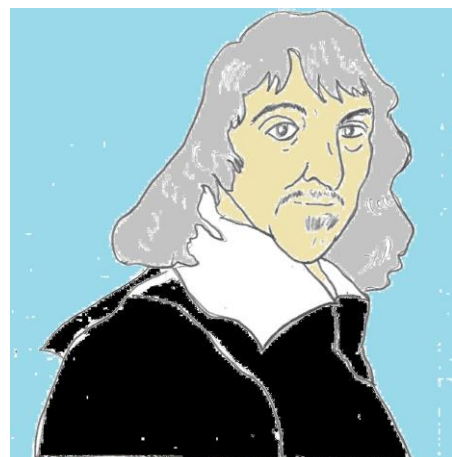
喜びといいますが、感謝を。創学舎の生徒の皆さんに、特に今まで私の授業を受けてくれた卒業生の皆さんに心から感謝の気持ちを伝えたいです。今もこうして仕事を続けられているのは間違いなく卒業生の皆さんのおかげです。本当にありがとうございます。

「最後に、創学舎ニュースを読んでいる方々へ一言お願いいたします。」

いつも創学舎ニュースをお読みいただきありがとうございます。私たち、創学舎の講師は年百回以上実施している授業研修を通して切磋琢磨し、授業力向上、サービス向上のため日々努力しています。今回はたまたま運良く私が賞を頂きましたが、私よりもっと優秀な講師や勉強熱心な期待の若手がたくさんいます。私たち、創学舎の講師は日々学び続けています。ぜひ今後創学舎にご期待ください。ありがとうございます。(インタビューアー・文 村田)

「困難は分割せよ」

創学舎 数学テキスト作成方針



「困難は分割せよ」

十七世紀に公刊された、ルネ・デカルトの『方法序説』の中の言葉です。デカルトは哲学者であり、数学者でもあった人です。「コギト・エルゴ・スム(我思う、故に我あり)」で有名な人物です。創学舎の数学の授業では、関数で座標平面を学習するときに登場します。『方法序説』を読んだのはだいぶ前で、すでに内容は忘れてしまいましたが、「困難は分割せよ」は、創学舎の数学テキスト作成の基本方針となっています。

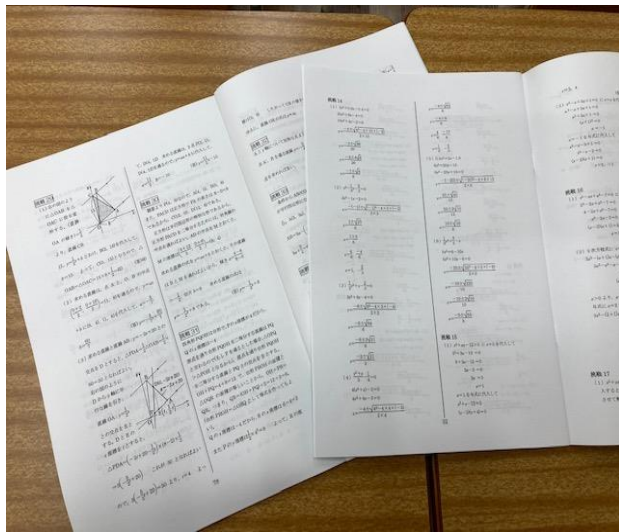
普段はあまり内部事情をお話することは無いのですが、今回はテキスト作成について書いてみたいと思います。ちなみにここからの内容は、中学生の数学テキストの話になります。

テキスト作成を前任者から引き継いだ時「困難は分割せよ」という方針も引き継ぎました。一つのことを学習するとき、普通の問題集ではひとまとまりにして学習することを、創学舎のテキストでは数ステップに分割しています。見る人によっては、「まわりくどい、一気に扱ってほしい」と思うかもしれませんが、しかし、一段のステップを低くして(スモールステップで)、誰でもきちんとステップを踏めば、多少難しい内容でも、身に着け

ることができるようになっています。

だから、授業を欠席したとき宿題に取り組んでみると「習っていないのに挑戦ができた!」というのは、テキストがスモールステップで作られているからにほかなりません。これまでなんとなく授業を受けていた人は、今度の数学の授業からスモールステップを意識してみるとテキストの見え方が変わってくるかもしれません。

さて、右記のようにずっと踏襲している方針もあれば、ここ数年で変えたこともあります。それは、宿題用の問題「挑戦」の答えに途中式などを含めた解説をつけたことです。



それまでは答えしか書いていませんでした。そうすると宿題ノートを見たとき、答えしか書いていなくて○になっていた場合、大半は答えを写して書いてきただけだと分かりました。テキストに解説を全て書いてしまうと、きちんと解いてきたのか、単に丸写ししてきたのかの区別がつきにくくなります。しかし、創学舎の目標である「自己学習能力の育成」を目指すうえで、挑戦をやった後自分で解説を読んで理解するということが大切であると考え、ほとんどの問題に解説をつけまし

た。皆さんが宿題にきちんと取り組んで自分で学習を進められるようにしました。というのは、生徒の皆さんを信じているからです。私は授業の初めに、「宿題の範囲で質問はないか?」と聞くようにしていますが、ほとんど質問する生徒はいません。もちろん質問があればしてくれていいのですが、解説をきちんと読んで理解できているのであれば、それは非常に喜ばしいことです。これからも、きちんとしたステップを踏み、学習内容をしっかり身につけていきましょう。(松永)

机の上以外での発見

〜セレンディピティ〜

高校三年生の夏、「マイナス×マイナスはなぜプラスなのか」をずっと考えていました。みなさんの中には何を今更そんなことをと思われるかもしれませんが、たえば借金(マイナス)を減らす(マイナス)ことはお金をもらうことと同じなのだから、マイナス×マイナスはプラスになるのではないかと。しかし、それは単なる具体例に過ぎません。その頃私が欲していたのは、もっと普遍的な説明でした。ところが、当たり前に思っていたことなのにきちんと説明するのは意外に難しく、そのことがとても不思議で、また妙に悔しかったのを覚えています。

さて、頭を離れることのなかったその疑問が解決したのは、ちょうど一年ほど経過したころ、浪人時代のことでした(そんなことばかり考えていたから浪人したのかもしれませんが)。解決の糸口がひらめいたのは、机の上ではありません。それは、地下鉄の階段を上がって、地上に出た瞬間でした。詳しくは覚えていませんが、足元に並んでいた円形のタイヤか何かの模様がヒントになって、アイ

デアが浮かんだのだと記憶しています。具体的には、単位ベクトルの偏角の回転移動との同一視による理解です。円形のタイヤが回転移動というヒントを与えてくれたのです。こうして当時の私の疑問は、一応の解決を見たのでした(なお、これは飽くまで私の中で納得のいく理解ができた、という意味であり、きちんとした証明とは言えませんのでご容赦願います。今になって思い返すと細かい粗もあります。そういった意味で『一応の』解決、です)。

時は流れて、大学の数学に四苦八苦していたときのお話。数学と格闘すること数時間、一向に埋まらない行間。四時間近く机に向かい、進捗はわずか数行、という有様です。たまたま私は机の前から逃亡しました。自転車に乗り、夜中の二時まで開いている古本屋で閉店まで漫画を立ち読みして、結局何も買わずに再び自転車に跨りました(迷惑な客ですね)。その帰り道のことで。真夜中の無音の中に、私の自転車の音だけが響いていました。その無機質な音と、周期的に回り続ける車輪の様子がヒントになりました。さっきまで全く分からなかったことが、その瞬間に突然はつきりとなつたのです。こういうのを青天の霹靂というのでしょうか。喜び勇んで帰宅した私は、その後明け方までかけて証明の続きを書きました。



さて、長々と私の経験談を綴りましたが、このように重要な気づきというのは、得てして机に向

かう時間以外になされることが多い気がします。先の二つのケースに共通するのは問題が常に頭の中にあつたこと、そして、タイヤや車輪という何らかのきっかけに触発されたことでした。一つの問題を何時間、何日も考え続けた経験は、中高生の皆さんにはあまりないかもしれません。しかし今後、すぐには解決できそうにない問題にももしも出会ったなら、その疑問を投げ出さず、常に頭の片隅に置いたまま過ごしてみてください。何かのきっかけで、その疑問が氷解するときが来るかもしれません。つつい机の前で何時間もウンウン考え続けてしまうような真面目な人にこそ、このような『机の上以外での発見』に出会ってほしいと切に願います。

ここまで原稿を書いて提出したところ、先輩の先生から「これって『セレンディピティ』の話だよね」と言われ、その名のタイトルの本まで貸していただきました。私が仮に『机の上以外での発見』と呼んでいたものには、何と既に名前があつたのです。科学史ではこうした「偶然に行われた発見」を『セレンディピティ』と呼んでいて、公衆浴場でのアルキメデスの発見も、りんごの落下から万有引力を着想したニュートンも、この一例ということでした。近年『セレンディピティ』は教育学の分野でもアクティブ・ラーニングと関連づけて注目を集めているようです。思いがけない発見に至るには、離れた事象を関連付ける力や仮説に縛られず観察から気づきにつなげる力、幼年時代には誰もが持っていた世界への関心や素朴な疑問を損なわずに保ち続けることなどが大切で、これは塾講師として子供たちに接する際、私自身も意識し続けていきたいと思っています。(神山)